

# 地震と震災の名前

## —将来の大震災に備えて—

石橋 克彦<sup>1)</sup>

### 1. はじめに

1995年1月17日の兵庫県南部地震(気象庁マグニチュード7.2)による震災は、現代技術によって相当程度まで大地を押さえ込んだと信じ切っていた日本の社会に、激しい衝撃を与えた。マスメディアは総力を挙げて取材・報道をおこなったが、たぶん、これまであまりにも地震問題に不熱心で不勉強だったことや、一気に過熱する日本的体質などがあいまって、適切でない反応がかなり見られた。

5,500人にもものぼる犠牲者の無念、残された方々の悲しみと生活の厳しさ、日本と世界に与えた大きな後遺症などを想えば、それは無理からぬ点もあるだろう。しかし、地震国日本の将来の大地震に合理的に備えるためには、大きな問題を残す。

にわかに関心を集めた「活断層」と、それに関連する「直下型地震」について、歪曲された解説が大量に流されているのは、その一例だが、これについては別の機会に論じたい。また、「関東大震災級にも耐えられる」という曖昧な説明に誤魔化されていたマスコミが、震災後も同じ過ちを繰り返していることについては、すでに述べた(石橋, 1995a)。この小文では、地震と震災の名前から、その奥に潜む問題を考えてみたい。

### 2. 「阪神大震災」

今回の震災(地震による災害)にたいするマスメディアの呼称が、1月23日頃から「阪神大震災」にほぼ統一された。しかし私は、この言葉に違和感を覚え、真実から遠ざかる危険性を感ずる。

違和感の背景には、私の二つの認識がある。

第一は、今後2,30年を考えれば、私たちは、今回程度かそれ以上の震災を何度か経験する可能性が高いという認識である。今後「アムールプレート東縁変動帯」(日本海東縁～信越～中部～北陸～近畿と駿河・南海トラフ沿い)で大地震がおこりやすくなり(石橋, 1995b)、また南関東でも「大地動乱の時代」に入る(石橋, 1994)と考えられるが、巨大都市から中小都市まで、災害に無防備な過密都市が大地震に襲われれば大震災は避けられないだろう。しかも私は、以前から、耐震技術の盲点や防災の弱点が噴出して大惨事が生ずることを懸念していた(石橋, 1994)。

第二は、今回大被害を免れた大阪が、それ自体非常に大きな震災の危険性を秘めており、少しでも災害を軽減する努力をしなければいけないという認識である。大阪城の乗る上町(うえまち)台地の西縁地下を南北に延びる上町断層は活断層である(例えば、藤田, 1989)。ここで大地震が発生すれば、地震規模・発生日時・気象などの条件が悪かった場合、大阪市とその近隣は、今回の神戸よりも厳しい壊滅的被害を受けるに違いない。

さて、「阪神」という言葉は、大阪の知人によると、大阪市北西部の梅田あたりから尼崎・西宮・芦屋を経て神戸市までの、ちょうど阪神電鉄沿線地域を指すニュアンスが強く、淡路島は別として、ほぼ今回の激甚被災地に一致するという。そう言われれば、そうかと思う。これほどの大惨事だから、地元で辛酸を舐めている方々の語感を尊重するのは大切なことだろう。

しかし、全国的にみたとき、東京地方や名古屋地

1) 建設省建築研究所国際地震工学部：  
〒305 つくば市立原1

キーワード：1995年兵庫県南部地震、阪神大震災、阪神、地震、震災、地震の名前、1995年神戸地震

方にたいして大阪・神戸地域という意味の、「阪神」という言葉が死語になったわけではないだろう。『広辞苑(第四版)』(岩波書店, 1991)では、「阪神」は“大阪と神戸”とだけ説明されている。

リアルタイムでテレビの被害の映像を見、活字メディアでそれを確認している現在の私たちは、目の前に展開している事実を「阪神大震災」と呼ぶのだと納得すればよい。しかし、10年後、20年後の日本の社会にとってはどうだろうか。「阪神大震災」という名称が一人歩きしたとき、また国土全体にわたる地震情勢の話をするとき、「阪神」という言葉には、地元の地名の微妙なアヤよりは全国的な視点でのマクロな意味合いのほうが強く付いて回るのはなかろうか。もしそうであれば、大阪と神戸が震災を受けたような呼称は、合理的な判断の障害になりかねない。もっと早い段階でも、将来の大阪圏の震災軽減に取り組むうえで、この言葉は短所こそあれ長所は何もないのではなかろうか。

なお、ローカルな「阪神」という地名にも、いろいろ問題があるようだ。大阪の人の話では、大阪府で一番被害の大きかった豊中市や、兵庫県の伊丹市、宝塚市などは、ややはずれる感じがしい。いっぽう兵庫県では、神戸市は「阪神」からは区別されているという(朝日新聞1月28日朝刊「震災報道」)。芦屋・西宮・尼崎などを指す「阪神間」という言葉もあり、実際、貝原兵庫県知事は、テレビで“神戸市と阪神間”というような言い方をされていた。つまり、地元の語感を尊重する立場でも、「阪神」で今回の震災地を表わすのは、かなり微妙なことである(もちろん淡路島は含まれない、そこで政府は2月10日から「阪神・淡路」にした)。

### 3. 「阪神大震災」の呼称の奥に潜むもの

そもそも、マスメディアが「阪神大震災」という呼称に塗りつぶされていったのは、悲惨な震災の全貌と細部を正確に伝えるために、現地に精通していなければわからないような地名のニュアンスを一番大事に考えたから、ではないだろう。“首都圏に次ぐ人口過密地を震度7の激震が襲い、市民生活や産業活動などに壊滅的な被害を与えている実態を踏まえて”(朝日新聞1月23日朝刊1面の囲み“名称、「阪神大震災」に”)という、もっと単純で漠然とし

た、一種の興奮の結果である疑いのほうが強い。

馬見塚(1995)の、“今度の地震をいつまでも気象庁がつけた「兵庫県南部地震」と呼ぶには抵抗がある。地震学的には中規模だからこれでよいかも知れないが、災害の大きさを考え、後世に記録と記憶を残すために、「阪神大震災」と呼びたい。阪神全体が被災したわけではないなどといってもらいたくない。関東大震災だって、関東全域が被災したわけではないのだ”という文章は、要するに大袈裟な名前をつけたいというヒステリックな気分をよく表わしている。しかも、この新聞社論説委員は、眼前の惨状に目を奪われて、今回とは質的に異なる関東大震災とその重大な歴史的意味(例えば、石橋, 1994)をまったく理解していないようにみえる。14万3千人弱の死者・行方不明と前年度一般会計予算の約3.7倍の損害を出した関東大震災は、7府県に被害を与え、朝鮮人虐殺や社会主義者の殺害をも含む社会現象で、経済・政治・社会・文化の各方面にわたって時代の大きな節目になったのである。

地震という「敵」(私は本当はこういう言葉を使いたくないが)の情勢や威力を知り、また「己」の力量と弱点を知って、日本の社会が将来の大地震に備えるためには、ジャーナリズムは、今回程度の震災で取り乱すべきではないのである。

震災がまだ流動的な段階で、ほとんど全メディアが一斉に同じ名称を使うこと自体、不気味な感じがする。各社が、地震と震災に関する合理的な知識と独自の識見をもっていれば、二社や三社、「神戸大震災」とか「兵庫県南部震災」とかを使うところが残ってもよさそうなものである。今回の状況は、「一億火の玉」となって「大東亜共栄圏」を叫んだ時代を想わせてしまう。朝日新聞の記事を例にとって、戦時中のマスコミが国民を戦争に駆り立て、いまもその体質は変わっていないのではないかと問う本(安田・石橋, 1994)があるが、今回まさに、将来を見据える目と批判精神の欠落した集団ヒステリ-的な体質が露呈したように思える。

### 4. 地震と震災の区別の必要性

自然現象である「地震」(震源断層運動という地下の岩石破壊)と社会現象である「震災」を分けて考えることは、地震・震災と適切に向き合うために

大切なことである。その理由は、例えば、関東大震災をもたらしたのは、同時に発生した巨大地震と小田原地震の両方(石橋, 1994)というようなケースがあって、地震を震災と区別して取り扱わないと、正しい将来予測に近づけなかったりするからである。私は、この小田原地震の例を一般の方々に説明する必要もあって、自著(石橋, 1994)のなかでは、とくに「地震・地震動・震災」という項目を設けて説明した。しかし、そのような努力も、地震と震災をごちゃ混ぜにしたマスコミの大合唱にかき消されそう。前に引用した馬見塚氏の発言はその一典型である。地震学者の談義など一般人には無用だといえるかもしれないが、もしそうならば一般人を馬鹿にしているというべきだし、社会全体で地震と震災に的確に立ち向かうことを放棄してしまうことになる。

日本の場合、被害が顕著な地震の名前は、地震後まもなく気象庁が庁議で決定する。その際、震源(岩石破壊の出発点)の区域名をそのまま地震名にするのが、最近の慣例だそう。これは、基本的には妥当だろう(ただし、破壊の出発点だけではなくて、破壊が広がった「震源域」を考慮してほしい)。なぜならば、早く名前を決めないと地震後の対応が不便なことは容易に想像できるし、震源位置や震源域(余震域にほぼ一致)がかなり客観的に求まるのたいてい、震災の状況や震災地域は、ある程度時間がたたないと定まらないからである。ちなみに、1989年10月にサンフランシスコに相当の被害を与えた大地震が「ロマプリエタ地震」と呼ばれているが、これは、震央(震源の直上の地表の点)に近い山の名前をとったものである。

今回の「1995年兵庫県南部地震」という正式名称は、固いとかお役所的だとかで、評判が悪いようだ。私は必ずしもそうは思わないが(正確を期するという意味では「南東部」か?), もっと簡潔にとか、覚えやすくというの、もっともである。好みや主観が入ってしまうが、「兵庫地震」とか「神戸地震」というのも有力候補かもしれない。ただ、「神戸地

震」だと、神戸以外の被災地に補助金が出にくいというようなことがおこるらしい。しかし、それは地震名の問題ではなく、硬直化した官僚システムの問題だろう。

震災の名前を正式に決める仕組みはない(なくてよいだろう)。気象庁の地震の名前に準ずれば、「兵庫県南部地震災害」とか「兵庫県南部震災」という呼称がありうるが、これらはいかにも冷たい。長い目で、かつグローバルにみれば、結局「1995年神戸地震」と「神戸震災」が一番よいのかもしれない。もちろん「神戸」は象徴であって、淡路や芦屋や西宮などの犠牲者や被害を軽んじているわけではない。世界的には、現在のところ“the 1995 Kobe earthquake”が定着している。

謝辞：小山真人・早川由紀夫・井村隆介・古川信雄・杉村 新の諸氏との会話は、本稿を執筆するうえで参考になった。佐藤興平氏からは、原稿を改善するための助言をいただいた。これらの方々に感謝いたします。

#### 引用文献

- 藤田和夫(1989)：近畿地方の地震活動の原点一五〇万年前に何が起ったか。続古地震—実像と虚像(萩原尊禮編著, 東京大学出版会), 79-92。  
 石橋克彦(1994)：大地動乱の時代—地震学者は警告する—。234 pp., 岩波書店。  
 石橋克彦(1995a)：自然の摂理に逆らわぬ文化を。世界, 3月号, 62-66。  
 石橋克彦(1995b)：1995年兵庫県南部地震のテクニクな意義と広域地震活動。1995年1月17日兵庫県南部地震調査速報会記録集, 日本第四紀学会・第四紀研究連絡委員会, 印刷中。  
 馬見塚達雄(1995)：自衛隊を頼れ! 阪神大震災の教訓。正論, 3月号, 220-229。  
 安田将三・石橋孝太郎(1994)：読んでびっくり朝日新聞の太平洋戦争記事—いま問われる新聞のあり方。255 pp., リヨン社。

---

ISHIBASHI Katsuhiko (1995): Names of an earthquake and an earthquake disaster: In order to prepare our-selves for future bigger ones.

---

〈受付：1995年2月22日〉